

糞線虫浸淫地域における高齢者療養施設での糞線虫疫学調査
Epidemiological Study of *Strongyloides stercoralis* at Retirement
Home in Strongyloides Endemic Area

加計呂麻徳洲会診療所 松尾敏明

愛知医科大学寄生虫学 伊藤 誠

愛知医科大学寄生虫学 木村英作

糞線虫は現在でも沖縄県や鹿児島県の奄美群島に保虫者が約 10%いるといわれている。また、その保虫者のほとんどは 65 歳以上といわれている。今回、鹿児島県大島郡瀬戸内町の加計呂麻島、特別養護老人ホーム、精神科病院療養型内科病棟において糞線虫の検査を行った。糞線虫の診断には普通寒天平板培地法を用いた。加計呂麻島の自宅に住む方（平均年齢 66.6 歳）では 110 人中 3 人（2.7%）の保虫者を認めた。また、同島内にある特別養護老人ホーム K では入所者（平均年齢 84.3 歳）51 人中 1 人（2.0%）しか認めなかったが、同じ瀬戸内町内にある（加計呂麻島外）療養型入院施設 O では入院患者（平均年齢 81.9 歳）27 中 4 人（14.8%）の保虫者を認めた。特別養護老人ホーム K では疥癬治療目的で今回の被験者約 25%に対し既にイベルメクチンが用いられていたが、療養型入院施設 O では使われていなかった。加計呂麻島のような人口の 50%が 65 歳以上で社会的共同生活の維持が困難になったいわゆる限界集落においては糞線虫症はいずれなくなる疾患であることが予想されるが、高齢者が集団生活を送る施設ではさらに保虫者の割合が高い可能性があり、そこでの駆虫薬投与は効率的に同地区から糞線虫を排除する可能性が示唆された。